

■ 編集だより

編集後記

2020年の最終号をお届けする時期になった。本年はCOVID-19の感染状況によって、学術活動にも大きな影響があった。本学会においても、学術総会がウェブ開催となった。現地に集い、討論し、親交を温めることはできなかったが、ほとんどの特別講演、教育講演、シンポジウム、一般演題がオンデマンドで視聴ができることによって、通常の総会では、並行して行われて聴講できなかった演題がじっくり聴講できたと多くの会員から好評をいただいた。危機によって、画期的な変化が起きるといった典型であったように感じる。

さて、本学会誌にとっても、2020年は刷新の年であった。本年3号の巻頭言でも述べたように、編集基本方針において精神科臨床を重んじる雑誌の性格を明確に示した。広く投稿を呼びかけることを目的に、会員以外からの投稿も受付可能とした。国際アドバイザーを委嘱し、査読を編集委員以外も行う体制を整え、実行に移している。また、迅速な査読を実行するとともに、受理された論文を Accepted Article として受理と同時に学会会員用本雑誌ホームページにおいて閲覧できるようにした。COVID-19に関連する論文を迅速に会員が閲覧できるようにしたいというところから、本欄を創設することになった。雑誌の刷新活動の甲斐あってか、論文投稿数が多くなっている。

また、今年の学術総会から創設された精神神経学雑誌投稿奨励賞に、厳正な審査の結果、以下の先生方の受賞が決定した。内藤顕人先生(名古屋大学附属病院)「3q29欠失を認めた統合失調症患者の1例」、江崎悠一先生(桶狭間病院 藤田こころケアセンター)「日常生活における日中光曝露と双極性障害のうつ症状との関連：APPLE コホートスタディからの横断解析」、志村哲祥先生(東京医科大学)「生活習慣改善は精神的不調の予防となりうるか—生活習慣・睡眠とストレス反応に関する縦断調査」、板橋登子先生(神奈川県立精神医療センター)「物質使用障害患者における断酒・断薬期間に関する報告—初診3年後予後調査より—」、福地 成先生(公益社団法人宮城県精神保健福祉協会 みやぎ心のケアセンター)「大災害後のコミュニティ支援に何が必要なか—みやぎ心のケアセンターの活動分析からみえること—」、宗 未来先生(東京歯科大学市川総合病院精神科)「アロマセラピーは健常高齢者の認知機能改善に効果があるのか？—ランダム化比較試験(RCT)による検証—」。投稿をお待ちしています。

2021年(123巻)1号からは、本誌のデザイン、フォント、図表などを綺麗かつ読みやすくリニューアルした雑誌をお届けする予定である。また、紙雑誌はPCN誌と同じ大きさのA4変型判となる。リニューアル第1号の巻頭言において、大森編集委員長が雑誌の刷新について詳述されるので、ぜひお読みいただきたい。

技術革新は著しく、AIを利用した自動翻訳エンジンを利用するとかなりの精度で翻訳ができる時代になってきた。本誌の内容を、自動翻訳エンジンで海外の方々に広く閲覧できるようにしたいと模索中である。本誌に掲載されている本邦における精神医学・医療の営みは海外の方々にとって貴重な示唆を与えるものと考えからである。

最後に、本年査読をしていただいた先生方に感謝を込めて、本号巻末にお名前を掲載させていただきます。精緻かつ迅速な査読をいただき、深く感謝申し上げます。多くの投稿をいただけるように、会員の先生方のご協力のもと、編集委員会もさらに知恵を絞って参ります。

細田真司